

# 静岡英和学院短期大学部学生の生成AIの利用実態

## Current Status of Generative AI Use among University Students

重 森 雅 嘉・波多野 純

生成AI (generative Artificial Intelligence) とは、学習したデータに基づき、新たな文章や画像、音声などを生成する人工知能を指す (Feuerriegel, Hartmann, Janiesch, & Zschech, 2023)。

生成AIは、2014年に対戦的生成ネットワーク (GAN) が提案されて以来、急速に発展し (Chakraborty, K S, Naik, Panja, & Manvitha, 2024)、2017年に提案されたTransformerアーキテクチャが自己注意機構により大規模言語モデルの基盤となり (Vaswani et al., 2017)、2018年以降のGPT 系列は自然言語生成性能を飛躍的に向上させた (Brown et al., 2020)。こうした技術的積み重ねを背景に、2022年末に公開されたChatGPT は一般社会に急速に浸透し、生成AIという概念が広く認知される契機となった (市川類, 2023)。

近年、生成AIは、企業活動、教育、研究、専門職業など多様な領域において急速に普及している。特に職場における利用に関しては、大規模調査により、労働者の約4割が何らかの形で生成AIを利用した経験を有していることが報告されており、生成AIが実験的段階を超えて実務レベルに浸透しつつあることが示されている (Brynjolfsson, Li, & Raymond, 2023)。同研究では、生成AIが文書作成、情報検索、アイデア生成など知識労働を中心に利用されている点が明らかにされている。産業横断的な視点から見ると、生成AIは情報技術、金融、医療、教育、製造業など複数の主要産業で導入が進んでいる。体系的レビュー研究では、生成AIが業務効率化、顧客対応の高度化、意思決定支援、コンテンツ生成などに活用されており、組織の生産性やサービス品質の向上に寄与していることが示されている (Dwivedi et al., 2023)。特に顧客サポートやマーケティング、ソフトウェア開発といった領域では、比較的早期から実装が進んでいる。

大学教育においては、英国を中心とした複数大学の学生を対象にした大規模調査で、テキスト生成ツール (ChatGPTなど) の利用率が2024年の30%から2025年には64%へと倍以上に増加、何らかの形でAIを利用した学生が2024年の66%から2025年には92%へと大幅に増加していることが示されている (Freeman, 2025)。特に生成AIを何らかの形で課題に活用した学生が2024年の53%から2025年には88%に増加している。また、本調査においては、高社会経済グループ (higher socio-economic groups) の学生は低社会経済グループ (lower socio-economic groups) の学生よりも記事要約、思考の構造化、AI生成テキストの編集の利用が多く、経済格差が生じていることも明らかにされている。

日本の大学生の状況は、全国大学生生活共同組合連合会が2024年に無作為に抽出したオンライン調査において (回答数11,590人、30大学生協、回収率24.9%)、生成AIの利用経験ありが、2023年46.7%から2024年68.2%に増加していることが示されている。利用内容としては、2024年の結果では、

授業や研究31.9%、論文・レポート作成の参考29.7%、翻訳・外国語作文18.9%、遊び・興味18.8%、メールなどの文章作成11.6%が利用率の高いものであった。2024年に東北学院大学の学生3097名（回収率28.2%）を対象にした調査では、生成AIの利用経験ありの学生は38.6%、利用したことのある生成AIとしては、ChatGPT3.5（無償）（87.0%）、Microsoft365 Copilot（Bing）が27.3%であった。なおChatGPTの有償利用は3.0%である。利用内容は、学業支援（37.8%）、個人的な探求心や学習（37.4%）、言語学習の補助（27.9%）、情報収集と分析（27.8%）、趣味や創作活動（20.8%）が上位であった。なお、利用したことがない学生（1901名、61.4%）の利用しない理由は、使い方がわからない（43.8%）、正確性に不安がある（39.1%）、人の作る内容の方がいいと思う（18.7%）であった。

このように国内外での大学生の生成AIの利用実態について、いくつかの調査は行われているが、いずれも限定的である。また短期大学生の利用実態はほとんど何もわかっていない。短期大学生は、大学生よりもこのようなツール利用が限定的である可能性や利用方法が安直である可能性が懸念される。また短期大学生は大学生よりも短期間で学びを得る必要があり、生成AIが効率的な学びの支援となる可能性もある。そこで、本研究は、静岡英和学院大学短期大学部の生成AIの現在の利用実態を大学生との比較により把握し、教育や指導、位置付けを検討する上での一助とすることを目的として実施された。

## 方 法

**調査対象者** 静岡英和学院大学短期大学部（以後、静岡英和短大とする）を対象として調査を行った。また、比較のため、著者の一人が非常勤講師として授業を行う、常葉大学教育学部心理教育学科産業・組織心理学の履修者（以後、常葉大学とする）、および早稲田大学社会科学部産業心理学Ⅱの履修者（以後、早稲田大学とする）の大学生も調査対象者とした（表1）。

表1 生成AIの利用アンケート回答者のプロフィール

所属		静岡英和短大	常葉大学	早稲田大学	全体
実施日		2025年1月6日から1月15日	2025年1月8日	2025年1月13日から1月20日	2025年1月6日から1月20日
回答者数		33人	77人	104人	215人
履修者（対象者）数		47人	112人	231人	390人
回答率（%）		70%	69%	45%	55%
性別	男性	3人	25人	63人	91人
	女性	29人	52人	40人	129人
	回答せず	1人	0人	0人	1人
学年	1年	20人	0人	0人	22人
	2年	13人	73人	70人	162人
	3年		0人	20人	20人
	4年		3人	13人	16人
年齢	平均	20.28	19.97	20.62	20.30
	SD	3.59	0.56	1.09	1.62

**手続き** Googleフォームを用いたアンケートを実施した。アンケートは「大学生・短期大学生の生成AI利用実態調査」として、基本的には選択肢を選ぶことにより回答する15問（大学名と年齢、その他を選んだ場合の内容記述を記述形式とした）を著者らが協議して設定した。このうち生成AIの利用実態を問うものは、「7. あなたは、これまでに「生成AI」ツール・アプリ・ソフトなどをつかったことがありますか。」（回答選択肢：使ったことがある・使ったことはない）、「8. 「生成AI」をどのような場面で使ったことがありますか。」（回答選択肢（複数回答可）：学業・就職活動・サークル活動・アルバイト・プライベート・その他）、「10. どのような作業で「生成AI」のツール・アプリ・ソフトを使っていますか。」（回答選択肢（複数回答可）：論文など文章の要約等22選択肢）、「12. レポートや課題（卒業論文も含む）の文章などの作成に生成AIをどのように利用していますか。」（回答選択肢：生成AIが生成した文章などをそのまま提出している等7選択肢）、「14. 生成AIの利用サービス名」（回答選択肢（複数回答可）：ChatGPT（OpenAI）等13選択肢）の5項目であった（付録参照）。

調査は心理学の授業の一環として授業内で内容等について説明し、アンケートGoogleフォームのURLやQRコードをスクリーンに投射したり、SNSサービスを利用して送ったりすることにより実施した。回答時間は5分から10分程度であった。

なお、本研究は、静岡英和学院大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：第533-309号、承認日：2024年12月18日）。

## 結 果

静岡英和短大生の回答者が少ないのは、現在静岡英和学院短大生は1学年約50名程度であり、今回比較対象とした常葉大学や早稲田大学の当該授業の履修者より母数が少ないためである。したがって、以後の結果を一般化する際には注意が必要である。

結果としては、生成AIについては、ほとんどの学生（各大学90%以上）が存在を知っているものであり、まったく知らない者は一人もいなかった。生成AIの認知度について大学間比較を行うため、「生成AIを知っている」か否か（「聞いたことはある」「知らない」を統合した非認知）を二値化し、Fisherの直接確率検定（両側）を用いて検討した。その結果、静岡英和短期大学と早稲田大学の間には有意な差が認められ（ $p=.013$ ）、効果量として算出した補正オッズ比は  $OR=0.04$  であった。このことは、静岡英和短期大学の学生が生成AIを認知しているオッズが、早稲田大学と比較して著しく低いことを示している。一方、静岡英和短期大学と常葉大学の比較では有意な差は認められなかった（ $p=.362$ ,  $OR=0.41$ ）。また、常葉大学と早稲田大学の比較においても、有意水準5%では差は認められなかった（ $p=.075$ , 補正 $OR=0.10$ ）が、早稲田大学の方が生成AIを認知している学生の割合が高い傾向が示された。

表2 所属ごとの生成AIの認知度

認知度	静岡英和短大	常葉大学	早稲田大学	全体
知っている	30人 (90%)	74人 (96%)	104人 (100%)	215人 (96%)
聞いたことはあるが どのようなものか分からない	3人 (9%)	3人 (4%)	0人 (0%)	8人 (4%)
知らない	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)

生成AIの利用経験について大学間の差を検討するため、大学（静岡英和短期大学・常葉大学・早稲田大学）×利用経験（利用あり／なし）のクロス表に基づき、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、大学と生成AI利用経験の間に有意な関連が認められた（ $\chi^2(2)=13.65$ ,  $p=.001$ ）。効果量として算出したCramer's Vは0.25であり、大学間における生成AI利用経験の差は中程度の大きさであることが示された。残差分析の結果、静岡英和短期大学では生成AIを「使ったことがない」学生が期待度数より多く、一方で早稲田大学では「使ったことがない」学生が期待度数より少ないことが示された。常葉大学では大きな偏りは認められなかった。

なんらかの形でAIを利用した学生の割合（92%）（2025年）と比べると短大生の利用率は低いと言えるが、大学生協の調査（2024年）における大学生の生成AI利用率68.2%や東北学院大学の調査における大学生の生成AIの利用率（2024年）38.65と比べると高いものとなっている。ただし、大学生協や東北学院大学の調査は2024年であり、今回の調査と比べると半年から1年の違いがある。昨今の生成AIの発展や利用率の増加を鑑みると、半年から1年の違いは大きい可能性が高いため、一概に比較はできない。

少なくとも、常葉大学や早稲田大学の大学生と比べると、静岡英和短大の学生の利用率は、少ないのは確かである。

表3 所属ごとの生成AI利用度

利用度	静岡英和短大	常葉大学	早稲田大学	全体
使ったことがある	24人 (75%)	64人 (83%)	100人 (96%)	194人 (88%)
使ったことがない	8人 (25%)	13人 (17%)	4人 (4%)	27人 (12%)

生成AIの利用場面は、静岡英和短大生も他の大学生も学業が半数を超えており、その他にはプライベートにおける利用、アルバイトや就職活動で利用されることが多いという結果であった（図1）。これらは細かな点で相違はあるものの、基本的に今回の調査においては短大もその他の大学

も利用内容はあまり変わらないということが言える。これは、全国調査の結果や東北学院大学の結果とも一致する。ただし、早稲田大学が静岡英和短大や常葉大学よりも多様な場面で生成AIを利用する学生が多かった。

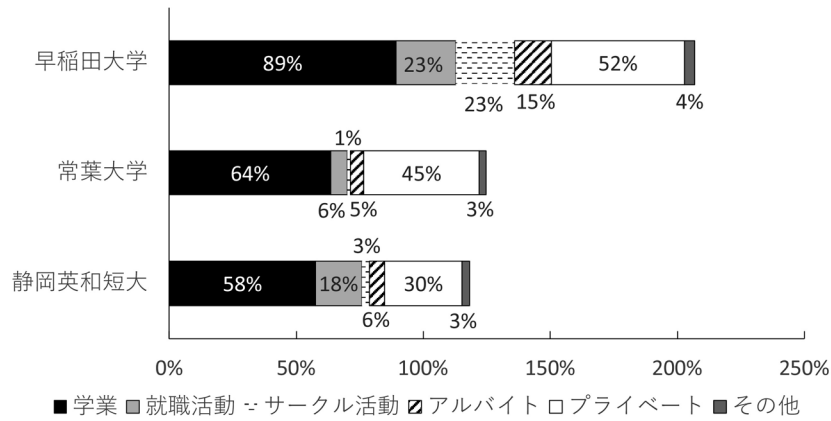


図1 所属ごとの生成AI利用場面

利用内容に関しては、回答が多かったもののみを示す(図2)。短大、大学、いずれの学生も文章要約や作成、添削・評価など文章作成に用いることが多い。また、情報収集・検索、アイデア出しにも多く用いられていることが分かる。特に短大生は履歴書等の作成や添削・評価に用いることが大学生よりも多い傾向が見られる。全体としては、早稲田の学生が他よりも多様な用途に用いていることが分かる。

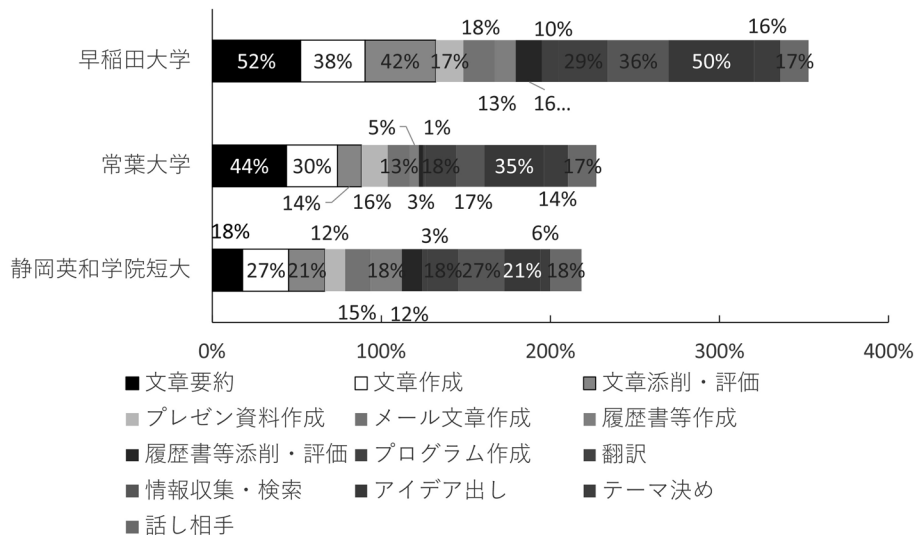


図2 所属ごとの生成AI利用内容

文章作成等に生成AIが用いられることが多いとすると、教育側としては生成AIで作成した文章をそのままレポートとして提出したりするような学生が多く、レポート作成能力の評価やレポート作成能力の育成に問題が出てきてしまう事態が生じていないかどうか懸念される場所である。

特に文章作成に関連した生成AIの使い方を尋ねた項目では、いずれの大学においてもほとんどの学生が、生成AIの文章を中心に修正したり、参考にして自分で文章を作成したりしているという結果であった（図3）。ただし、静岡英和短大と常葉大学には、若干名ではあるが生成AIの文章をそのまま提出すると答えた学生もいる。その逆に、いずれの大学においてもレポートや課題には生成AIは使わないとする学生も少なからず存在する。

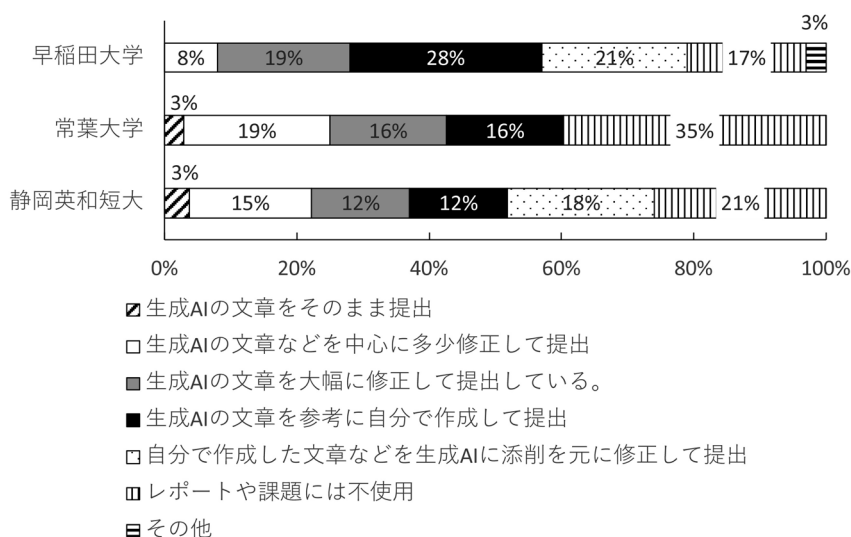


図3 所属別文章作成における生成AIの使い方

## 考 察

生成AIの認知度は早稲田大学の学生と比べると明確な違いがあったが、常葉大学の学生と比べても静岡英和短大生の認知度が低いということにはなかった（表2）。ただし、これは生成AIの利用を勧めている著者の授業を履修している学生だからかもしれない。

利用に関しては大学生に比べ静岡英和短大生は使った経験がない学生が多いことが示されている（表3）。ただし、静岡英和短大生が大学生よりも使ったことがないと答える学生が多かったのは、実際には使っていても生成AIを使っているという意識がなかった可能性もある。

現在、多くの検索エンジンが生成AIを導入しており、本人が生成AIを利用しているつもりがない場合でも、無自覚に生成AIを利用している可能性もある。現在多くの検索エンジンは、検索を行う際に利用者の生成AI利用の意図に関わらず生成AIによる検索結果が最初に表示されたり、意図すれば簡便に利用できたりするようになっている。たとえば、Googleは検索を開始した際に「AIによる概要」（2024年5月14日から米国で正式導入）が表示される場合もたびたびあり、また検索手法として「AIモード」（2025年から米国や日本で導入）を選択できるようになっている。Yahoo! JAPANでも同様に検索によっては結果に生成AI回答が表示されたり（2025年からPC版にも拡大）、「AIアシスタント」においてチャット形式で生成AIを用いた検索が利用できるようになっていたり（2025年から）する。Microsoft Bingも検索結果表示の途中でAIによる要約・生成回答

が示されたり、生成AI (Copilot) 検索ができるようになっていたりする (いずれも2025年から)。

利用場面や利用内容に関しては静岡英和短大生も大学生と変わらない多様な場面、内容で生成AIを用いていることが分かった (図1、図2)。ただし、早稲田大学の学生は、その中でも特に積極的に多様な場面、内容で生成AIを用いている者が多いことが窺えた。

興味深いのは、いずれの大学においても話し相手として生成AIを用いている学生がいるということである。この結果は、生成AIが単なる道具としてではなく、対話的存在として認識されている可能性を示唆する。1960年代に会話を理解することなく文字列変換するだけの会話プログラムであるELIZAに対して、理解されていると感じる現象 (ELIZA効果) が話題になった (Weizenbaum, 1966)。生成AIはELIZAよりもはるかに高度な言語的、感情的手がかりを提供するため、もはやAIか人間化を識別することが難しくなっており、擬人化は錯覚ではなくなっているという指摘もある (Peter, Riemer, & West, 2025)。

文章作成等における生成AIの利用においては、ほとんどの学生は、生成AIの文章を中心に修正したり、参考にして自分で文章を作成したりしているということであったが、常葉大学生と静岡英和短大生においては生成AIの文章をそのまま提出するという学生が若干名いた (図3)。もちろん、これらは回答者が意図的に選択するものができるものであるため、虚偽である可能性もある。また、それぞれの大学における生成AIの利用方針によるところも大きく影響している可能性がある。

生成AIの利用に関するガイドラインとして、常葉大学は2023年5月15日に副学長および教務部長名で、「チャットGPT等生成系AI (人工知能) 利用に関する対応について (お知らせ)」を学生に向けて発信している。この中で、【生成系AIの利用の留意点】及び【成績評価の基本方針】を確認し、適切な活用を訴えており、生成系AIの作成した文章等をそのまま受け取るのではなく、それらの情報を批判的な目で検証し、能動的に利用できる力をつけるよう依頼している。このように、利用に関しては注意を要するが、利用できる力は能動的につけてほしいというところが常葉大学の方針と考えられる。ただし、成績評価に関しては、「成績評価に用いられるレポート等を作成する際、生成系AIの出力例や検出ツール等で生成系AIの利用が確認された場合は、学生本人が作成したものではないため、不正行為に該当すると見なし、本学の諸規程 (「定期試験における不正行為に関する取扱細則」や「学生懲戒規程」等) に則り、厳格な対応を行う。ただし、授業の内容により授業担当者の許可・指示の範囲内で、【生成系AIの利用の留意点】を意識して生成系AIを活用することを認める場合がある。」としている。

早稲田大学も2023年4月18日に副総長 (教学担当・プロボスト) 名で、「生成AIなどの利用について」を学生および教職員向けに発信している。その中で、「たくましい知性」を標榜する早稲田の学生は、生成AIの正しい使い方に慣れ親しんでおく必要があるとする一方、生成AIが作成した論文等をそのまま提出すれば、それだけでカンニング等と同様の不正行為となり処罰されるとしている。

いずれの大学も、生成AIが作成した文章をそのままレポートとして提出した場合、その事実が把握した場合は不正行為とみなすとしているが、生成AI自体は利点と欠点を理解し、積極的に利

用することを促している。静岡英和学院大学は、これに関する大学としてのガイドライン等は示していない。

生成AIが作成した文章をそのままレポートして提出した場合、人間が作成したものではなく生成AIが作成したものと正確に判別することができるのだろうか。これに関しては2023年のレビューでは、いくつかの識別ソフトウェアの精度を確認しているが、ソフトウェアの判断だけで生成AIが書いた文章か人間が書いた文章かを断定することは難しいようである。また、少なくとも「水分子は酸素原子1つと水素原子2つからなる」のような一般的記述は区別不可能であり、また人間が書いた文を生成AIが書いた文と誤判定する偽陽性や逆に生成AIが書いた文と誤判定する偽陰性は多数報告されており、学術不正の証拠として検出ツールを用いるのは不適切とも言われている(Majovsky, Černý, Netuka, & Mikolov, 2024)。将来的にも、検出器が存在する限り生成器がそれを回避するように進化するため、完全な判別ツールを開発することは不可能だとも言われる(Majovsky, Černý, Netuka, & Mikolov, 2024)。

このような現状を鑑みると、論文やレポートに生成AIを使わないように指導することは、あまり意味のないことであり、むしろ適切な利用方法を指導、教育すると同時に、倫理的な問題や学びの効果に関する問題を指導していく必要があると考えられる。学びの効果に関しては、学生が大学や短期大学に入り、何を学ぶことが学生にとって重要なことなのかを意識させることが前提となる。これを基に、学生が重要な学びを得るために生成AIをどのように活用することが適切なかを考えさせる必要がある。たとえば、レポート作成に関しては生成AIを使った方がいいレポートを作成できるのであれば、レポート作成能力を身につける上でも適切に生成AIを使うことが重要と考えられる。しかし、生成AIにレポートを作成させ、そのまま提出してしまうと、レポート作成能力は身につかない。レポート作成能力を身につけるためには、どのように生成AIを使うことが適切なかを指導、教育することが必要となる。また、生成AIが事実と異なる情報をあたかも真実であるかのようにもっともらしく生成してしまう現象(hallucination)等を回避するためにどのようにすべきかなど、生成AIを使う際の具体的な問題回避の方法なども指導、教育する必要がある。

たとえば、著者の一人は、レポート作成に関して、以下のやり方で生成AIを積極的に利用することを奨励している。

1. 自分でレポートを作成
2. 生成AIに評価、修正を依頼
3. 生成AIの評価、修正を参考に自分で判断してレポートを修正
4. 生成AIにレポート作成を依頼
5. 生成AIが作成したレポートと比較して自分で判断して修正して提出

必ずしもこの5段階のすべてを実施する必要はなく、1、2、3で提出、1、4、5で提出などのやり方も奨励している。また、ハルシネーションを回避するために、(1) 読んで分からない部分は、さらに生成AIにわかりやすく説明してもらい、それでもわからない場合は削除すること、(2)

主張の根拠となるデータや文献も示させ、直接そのデータや文献を確認し、確認できない場合は当該の記述は削除することなどを指導している。

最初に、説明したように、生成AIはこの1、2年で急速に社会に広まってきており、その勢いは今後も増すものと考えられる。今回の調査において、静岡英和短大生も、すでにさまざまな場面で生成AIを利用していることが分かった。今後の生成AIの発展とともに発展する情報化社会では、生成AIの適切な利用能力を持っていることが少なくとも高等教育を受けたものには期待されるものであると考えられる。そのために、静岡英和学院短期大学部としての生成AIの利用ガイドラインや積極的で適切な利用に関する指導や教育を学生に提供していく必要があると思われる。

## 引用文献

- Brown, T., Mann, B., Ryder, N., Subbiah, M., Kaplan, J., Dhariwal, P., . . . Amodei, D. (2020). Language models are few-shot learners. *Advances in Neural Information Processing Systems*, 33, 1877-1901. doi:10.48550/arXiv.2005.14165
- Brynjolfsson, E., Li, D., & Raymond, L. (2023). Generative AI at Work.
- Chakraborty, T., K S, U. R., Naik, S., Panja, M., & Manvitha, B. (2024). Ten Years of Generative Adversarial Nets (GANs) : A survey of the state-of-the-art. *Machine Learning: Science and Technology*, 5. doi:10.1088/2632-2153/ad1f77
- Dwivedi, Y. K., Kshetri, N., Hughes, L., Slade, E. L., Jeyaraj, A., Kar, A. K., . . . Wright, R. (2023). Opinion Paper: “So what if ChatGPT wrote it?” Multidisciplinary perspectives on opportunities, challenges and implications of generative conversational AI for research, practice and policy. *International Journal of Information Management*, 71, 102642. doi:https://doi.org/10.1016/j.ijinfomgt.2023.102642
- Freeman, J. (2025). Student generative AI Survey 2025. *HEPI Policy Note*, 61.
- He, R., Cao, J., & Tan, T. (2025). Generative artificial intelligence: a historical perspective. *National Science Review*, 12 (5). doi:10.1093/nsr/nwaf050
- 市川類 (2023). 第四次AIブーム (ChatGPT) による世界のAIガバナンス制度の進化 : ChatGPT型AIシステムの社会的リスクと世界のAI規制・ガバナンス政策の動向. *Institute of Innovation Research, Hitotsubashi University*.
- Majovsky, M., Černý, M., Netuka, D., & Mikolov, T. (2024). Perfect detection of computer-generated text faces fundamental challenges. *Cell Reports Physical Science*. doi:10.1016/j.xcrp.2023.101769
- Peter, S., Riemer, K., & West, J. D. (2025). The benefits and dangers of anthropomorphic conversational agents. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 122 (22), e2415898122. doi:doi:10.1073/pnas.2415898122

Vaswani, A., Shazeer, N., Parmar, N., Uszkoreit, J., Jones, L., Gomez, A., . . .

Polosukhin, I. (2017). Attention Is All You Need. doi:10.48550/arXiv.1706.03762

Weizenbaum, J. (1966). ELIZA-a computer program for the study of natural language communication between man and machine. *Communications of the ACM*, 9, 36 - 45.

全国大学生生活協同組合連合会 (2025). 第60回学生生活実態調査概要報告.

## 付 録

### 大学生・短期大学生の生成AI利用実態調査

この調査は、大学生・短期大学生の生成AI（ChatGPTなど）の利用実態について尋ねるものです。データは平均値など統計的に処理され、特定の個人の利用実態を明らかにしたり、公開したりすることは決してありません。回答内容が授業の成績やその他の活動に影響することはありません。回答者の利用実態に即してもっとも当てはまると思われるものを回答いただきたく思います。

調査に同意してくださる方は次の質問で「同意する」を選択し、回答をお願いします。同意していただけない方はこのままフォームを閉じてください。

### 研究責任者

静岡英和学院大学人間社会学部 波多野純

静岡英和学院大学短期大学部 重森雅嘉

本調査に関する問い合わせは以下をお願いします。

静岡英和学院大学短期大学部 重森雅嘉 gemolab09@gmail.com

1. 調査に同意していただけますか。

1つだけマークしてください。

同意する

同意しない（フォームを閉じてください）

2.

大学名

3. 学年

1つだけマークしてください。

1

2

3

4

4. 性別

1つだけマークしてください。

男

女

回答しない

5. 年齢

6. あなたは生成AI（ChatGPTなど）について知っていますか

1つだけマークしてください。

知っている

聞いたことはあるがどのようなものかわからない

知らない

7. あなたは、これまでに「生成AI」ツール・アプリ・ソフトなどを使ったことがありますか。

1つだけマークしてください。

使ったことがある

使ったことはない

8. 「生成AI」をどのような場面で使ったことがありますか。

当てはまるものをすべて選択してください。

学業

就職活動

サークル活動

アルバイト

プライベート

その他:

9. 上記で「その他」を選んだ方は利用場面を具体的に記入してください。

10. どのような作業で「生成AI」のツール・アプリ・ソフトを使っていますか。

(いくつでも) 当てはまるものをすべて選択してください。

- 論文など文章の要約
- レポートなどの文章の作成
- レポートなどの文章の添削・評価
- プレゼンテーション資料の作成
- メール文章の作成
- メールの問い合わせ対応
- 履歴書やエントリーシートの作成
- 履歴書やエントリーシートの添削・評価
- プログラム作成 (Rなども含む)
- プログラムチェック (Rなども含む)
- 挿絵やイラスト作成
- 動画の作成・編集
- 音楽の作成・編集
- 音声の作成・編集
- テスト問題や宿題の解答補助
- 外国語文章の翻訳
- 音声書き起こし
- 情報収集・検索
- アイデア出し・検索
- 研究などのテーマ決め
- 話し相手
- その他

11. 上記で「その他」を選んだ方は作業を具体的に記入してください。

12. レポートや課題 (卒業論文も含む) の文章などの作成に生成AIをどのように利用していますか。

1つだけマークしてください。

- 生成AIが生成した文章などをそのまま提出している。
- 生成AIが生成した文章などを中心に多少修正を加えて提出している。
- 生成AIが生成した文章などをベースに自分で大幅に修正を加えて提出している。
- 生成AIが生成した文章などを参考に自分で文章などを作成して提出している。
- 自分で作成した文章などを生成AIに添削・評価してもらい、それを元に修正して提出している。
- レポートや課題の文章で生成AIは利用していない。
- その他

13. 上記で「その他」を選んだ方は利用方法を具体的に記入してください。

14. 生成AIの利用サービス名

当てはまるものをすべて選択してください。

ChatGPT (OpenAI)

Microsoft Copilot

Perplexity

Gemini (Google Bard)

DALL-E (OpenAI)

MidJourney

Notion AI

Microsoft Azure AI

Adobe FireXy

Canva

Stable Diffusion

invideo AI

その他

15. 上記で「その他」を選んだ方はサービス名を具体的に記入してください。